

審査の結果の要旨

氏名 今井福司

第二次世界大戦後の連合国軍による日本占領期に、さまざまな教育改革が行われた。本論文は、アメリカの学校で実施が始まっていた専門職による学校図書館サービスが、どのように日本に導入されたか歴史的に解明しようとしたものである。

本論文は6章構成である。第1章では、学校史や図書館史等の先行研究を精査した上で、対象を20世紀前半のアメリカ学校史のなかでの図書館の位置づけを検討することから始めて、その影響が日本占領期の学校改革にどのように現れたかまでを描くこととしている。その際に、学校教育の目標、学校教育実践における学校図書館の活用法、学校図書館を運営する職員を中心に述べることを宣言する。

第2章では、アメリカの1920年代から30年代にかけての学校図書館関係の教育実践について南部地域を中心に検討し、教材資料を備えてカリキュラム展開を支援するとともに、余暇を過ごす場として位置づけられたこと、図書館員の配置が進められ、教員と対等な専門職的位置づけが一部では始まっていたことを明らかにした。第3章では、20世紀前半のアメリカで学校図書館についての議論が、ジョン・デューイの「実験学校」において図書室を中心に位置づけ新教育の一翼を担う提案があったことから始まり、それが広がってカリフォルニア州やヴァージニア州の教育改革プログラムでは学校図書館の役割に言及していることを指摘した。

第4章では、日本の占領初期の学校教育改革の目標が児童・生徒の自発的な活動による個性を伸ばす教育や問題解決学習にあったのに対応して、CIEと文部省により学校図書館を振興する方法が検討されたが、その際に担当者が日本の学校現場に合わせて教員の兼務になるなどの読み換えや修正が行われたことを指摘した。第5章では、占領期のカリキュラム改革運動において知られている学校において、明石附小プランなどを除いて、学校図書館に力を入れ専門の担当者がいるところはきわめて少なかったことを指摘した。

最後の第6章では、以上をまとめて、20世紀前半のアメリカの学校においては教育を支援する施設として学校図書館を位置づけ、そのために専門職員を配置する考え方がつくられたが、これが占領期の教育政策を通じて日本に入る際に修正が行われ、まもなく占領政策の転換があって、学校教育と図書館の十分な結びつきがなされないうちに、学校関係者の図書館に対する関心は低下していったとしている。

本研究の特徴は、一貫した視点と実証的な方法により、アメリカでつくられた学校教育を直接支援する図書館サービスおよびそのための専門職配置の考え方をまず分析し、次に、それらが日本に導入される際に、学校現場では一部の学校で試験的に実施された程度で十分な定着をみないままに教育政策の転換に至った状況を対比的にとらえることにより、それらの違いと日本での変容の過程を明らかにしたことである。これにより博士（教育学）の水準を十分に満たす研究であると認定された。